

デオバンニの接吻を額に受けてライモンドは安らかに搖籃に眠つて居る。皆の者が去つて實母と私と二人が残つた時、實母がいつもの同情に富んだ聲で、

「可憐さふな老人ねえ。ペトルさんからの御話だが、彼の老人は毎晩の様に家のまわりに忍ぶ様に来て、ライモンドの事を窺つて居る相だつてねえ。洗禮日の晩にもデオバンニさんは私の家の庭の處の窓を開けて置いて呉れと頼んださふだよ。其れは家に上るのが勿體ないからせめて窓からでも覗いてなりとライモンドの顔が見たいこの事だつてねえ。彼の御老爺さんは眞當に可憐相だよ。」

私は只ライモンドの寢息を聞いた。什ふ思つても健全な息をして居る。何處とても故障がありさふもない。

「御母様、今日は咳は——？」
と聽いて見た。

「今日も咳をした事はしたけれども心配する程でもないよ。」

「風邪を引いたのではないでせふか？」

「どふして風邪を引くものかね、此處に澤山着物を着せて居るもの。」

一つの考が頭に閃いた。突然身體が慄へ出して實母の前に居るのが堪え難く急に「實母に氣とられはしまいか」と思ふと眼が眩む様な氣がする。私は搖籃の方に行つて身を屈めた。

實母は一寸私を變に思つたらしかつたがそれは私の爲めには都合のよい思ひかたをして居た。

「御前も中々心配性だねえ。ライモンドは安らかに眠つて居るではないか。其のまゝ元氣そふな寢息を御覽！」

實母は斯ふ云つたにもかゝはらず何となく實母が私の心の中を疑つて居るやうな氣がして堪えられないので、私は、

『さふ。風邪なんか引いて居るさふにもありませんねえ。』と云つて直ぐに又、

『實母さんは此處に御出ですか？』

『アンナさんが歸る迄は居るよ。』

『では私は出で行きますよ。』

私はジウリアノの處に行つた。ジウリアノは私を待つて居た。其の時は既う夕餐の用意は病床の側に整つて居た。斯く私がジウリアノと一緒に夕餐をするのはジウリアノの話を機ませ食を進ませる爲めで、それが私の最も大切な務であつた。

此の晩はなす事云ふ事に皆私の精神は興奮して居た。自分を顧る様な力はなくなつてしまつて、遂日頃の癖が出て醫者からジウリアノに進めてある葡萄酒の瓶を取つて二三杯傾けた。而してジウリアノにも平常よりも少し餘計に飲ませやうと思つて、

『今日は少しは具合が良いだらう？』

『ハイ、善いやうで御座います。』

『若し御前が私の云ふ様にしたら屹度クリスマスには床離れが出来るよ。まだ十日もあるんぢやないか。十日の間にうんと元氣になるのさ、それもう一杯』と私が強いるとジウリ

アノは驚いた様に私を見て、暫く眸を離さなかつたが、はては疲れて來て險が次第に重くなつて、座る事が出来ず、倒れさふになつた。が私の差し出した洋杯に唇をあてゝ居た。私は、

『病氣が治つたら何處に遊びに行かふかね？』

と云ふとジウリアノは微に頬笑むで、

『ギラリラに行き度ふ御座いますのねえ。アリンさんにさふ云つて別荘を開けて戴きませうか。』

と云つて又頬笑んだ。

『もふ話し疲れただらう。』

と私はジウリアノが喘ぐばかりにして居るのを見て斯ふ云つた。而して兩手でジウリアノを抱いていつもの通りに仰のけに寝かし、枕に休ませた。暫くするとジウリアノは、

『さふ、眞當に行きませうねえ』

と身體を横にした。

無数の不安が私を領した。或物は私の心を煽てる様に、或る物は悚だたせる様に、或物は操ぐる様に愈々迫つて来る。既ふ堪え難くなる。何とか所置せねばならぬ。何處か静かな所に身を隠して能く自分の心を落附け、精密な計畫を立て、あらゆる事に用意して見たいと此様な無数の矛盾した衝動が限りなく連続して来る。眼が眩む程に渦巻く心の波が私の内部を極度まで掻きまわした。

此の時輝きが私の胸裡に這入つた。凶悪の光の波で私の今迄積み重ねた記憶を根底から呼び覺して、總ての意識を働かせる。よく記憶して居ると云ふ事は感ずるが、其記憶の所以を辿る事は出来ぬ。——昔讀んだ何かを思ひ浮べた様、其の本の記事がポット浮んで出た。何だか今其が實際行はれる様な氣がする。幻の神秘とも思はれる。私の今斷行しやうとする事を私以外の強い力が私の側へ来て、私の迷ふのを叱り飛ばし「斷行せよ。斯く斷行せよ。斯くの如き境遇にありし者は斷行した」と勵まして呉れるものがある。さふ云ふ

のが誰だかもとより判らぬ、けれども何となく私より先輩の言葉の様な氣になる。而して私に斯うせよ。ああせよと種々の手本を見せて居る様な氣がする。もふ全く獨創的、自發的の事がなくなつて偉い先輩のした事を真似する様に氣強くなつた。

ジウリアノの室を出てから廊下で種々の事を考へて迷つたが誰にも逢はなかつた。嬰兒の室に行つて扉に耳を寄せて聽いて見ると實母の聲がする。私は又其處から逃げた。實母が其處から今に去らないとすれば小供の病氣が重いのだらう。嬰兒の氣管枝加答兒がどの様に苦しそふに見えるかと云ふ事も私は知つて居る。マリアが生れて三ヶ月経つた時にかかつた事がある。彼の時を思ひ出すと矢張り始め二三度咳をして而して後に眠るのであつた。「待つて居れば天の神様が良くして下さる。自分で斷行する必要もないであらう」と思ひながら、再び扉の所へ行つて耳をつけて見ると、まだ實母の話し聲が聞き取れる。私は扉を開けて這入つた。

「ライモンドは何ですか？」と私の不安を隠さず斯ふ問ふた。

「あゝ既ふいゝよ、もふ咳もせず此様に元氣な呼吸をして居るよ。體温も平常でお乳も飲

む様になつたよ。』

と云つて實母は極めて平々な顔付であつた。アンナが寢臺の上へ腰掛け、ライモンドを抱いて乳を飲まして居る。乳が喉を通る音が聞える。アンナは頭を垂れて彫像の様に少しも動かす床を凝視して居る。トポトポと燃へる洋燈の光がアンナの赤い着物を照して居た。『此處は温か過ぎる様ではないですか。』

と私は一寸熱く感じたので左様云つた。暖爐の廻りには小供の濡れたものが干してあり、湯沸の中に湯もたぎつて居る。時々寒風が窓を打つ音がして家の外の寒さを思はせる。

『寒さふな風ねえ。』と實母も云つた。

私は唯不安の心して外面の風の音を聞いた。此の時風の糸が急に私の髓を貫いて冷たさを通す様な気がしたので窓の所に行つて慄える指でそつと窓を開けた。而して其冷たい硝子を透して夜の景色を窺ふとしたが、私の呼吸で硝子が曇つて終つたが、空に寒さふに懸つた星が眸にうつつた。

『然し晴れた夜ですねえ。』

と云ひながら私は窓から離れた。

乳母の胸のライモンドを見ながら私は外面の夜の凶兆に満ちた景色を想像した。

『今晚ジウリアノの食事は什ふだつたかね?』

と實母は優しく私に問ふ。

『ハイ』と答へて其の時漲つた私の心の儘を飾りなく、

『御實母さんは今晚はジウリアノの處に一度も御出になりませんでしたねえ、貴女はライ

モンドの事ばかり心配して、ジウリアノを打ち捨て、御出なされる。』

と遂に私は斯う云つたのであつた。

次の日の朝ゼムマ國手が嬰兒を診察して健全だと云つた。而して實母の心配した咳は何の障もないとの事、只餘りに家族の者が心配するのを見て國手が頬笑みながら、此の近頃の烈しい寒さ、殊に湯を使ふ場合などには、用心するに越した事はないと云つたのであつた。

國手は右の様な事をジウリアノの前でも云つたので私等は其れを聞いた。其の間妻と私との眸は二三度忙しい光を交換したのであつた。

さふ！天意は我に幸せぬ。私は自ら進んで機會を捕へて事を斷行しよふ。私は決心した。今夜……今夜は必ず決行するのだ。

私はあらゆる注意力を一つに集めて感覺を機敏にして、云ふ事爲す事を總て慎んだ。片言の中にも疑を引き起さぬ様、一瞬時も忽にせず全意識を今宵遂行ける目的の爲に集めた。今宵は必ず幼兒と唯二人になつてあらゆる家族からかけ離れ誰知らぬ間に事を行ふ機會を

作らねばならぬと。

私は晝の間四五回も育児室に行つて見たがいつでもアンナが氣怠るさふに立つて居る。種々問をかけても一言か二言かの返事をするのみ、其れも何だか慳貧で私は遂に悚立つて其處を立ち去つた。

フリスナは食事の時より外は育児室を出た事はない、出ても直ぐに實母のエヂス夫人が誰か来て居る。其の誰かに私が代る事が出来ない事はないが、よく突然に人が這入つて来る。何れにしても機會を神に手よつてアンナの留守を窺ふより外はない。あゝ其の機會が何時来るであらう？いつまで斯くして此の不安と注意とをつゞけ得やう。

私が複雑な迷いの中に胸を疲らして居る時エヂス夫人がマリアとナタリアとを連れて這入つて来た。黒豹の着物と帽子とを着けた二人の娘が今しがた戸外の遊戯から歸つて来たところで、其の頬は蔷薇色に赤く、楽しさふに喋べつて私の膝に抱きついた。部屋の中が俄に賑かになる。

マリヤが

「エヂスさん。降誕祭が来たのを知つて居て？今夜教會堂で Novena があつてよ。又ベトロさんが美しい着物を着て出るのねえ。御祖母さんが私に樹を下さるのねえ。御母さんは降誕祭には治らないの、御母さんを治して頂戴よ。」などと仇氣ない事を云ふ。

ナタリアはライモンドを覗きこんで見ると、ライモンドは邪魔になる紐を脱がふと思つて頻りに足を悶搔いて居る。

『抱いてやるわ。』

とナタリアは止めても聴かず身體一杯力をこめて嬰兒を抱き挙げ、急に眞面目な顔になつて御母様になつた様な目附きをする。

『私もよ。』

とマリアが又争つた。

嬰兒は泣きもせず可愛い姉の腕から腕に移つた。マリアが抱いて歩く間にライモンドが床に落かけた。エヂス夫人が驚いて嬰兒を受取つてアンナに渡す。アンナは深い沈思にでも沈んで居る様な顔をして嚴かに其れを抱いた。

私は再び自分の考へに沈みかけて、

「今夜から Novena があるの？」と聴いて見た。

「今夜からよ。」

アンナを見ると耳を傾けて私等の話を頻に聴いて居る。

「何人樂人が出るの？」と再び問ひかけるとマリアが人から聴いた事を細々に覚えて居て

答へる。

「五人よ。笛吹か二人、タラリネット二人。其れから風笛が一人よ。皆山の彼方から來るつて事よ。」と云つてアンナの方を向きながら「大方此の叔母さんのお國からよ。モンテネグロからだわ。」

アンナの目はその鋭さふな光を失つて涙ぐんだ眸には一寸淋しい色が漂つた。何となく感慨めいた表情をした。私は故郷を捨てた哀れな乳母が懷郷の念に堪えぬのだらうと思ひやつた。

夕暮は近づいて来た。私は教會堂の方に行つて Novena の準備を見た。マドンナの像やベスレヘムの景色や、様々の花や、白い蠟燭やがあつた。足の行く儘に戸外を逍遙しながらライモンドの部屋の窓を見た。胸の中の轟を鎮めやうと思つて故意と歩調を速めて歩いた。寒い風が厳しく吹いて来る。

氷原の夕暮の様な身を切る風を通して鉛色な森が彼方に見える、空も金色でアソロの屈託した様な流れも鈍い色であつた。

此の時急に私のハートは滅入る様になつた。誰か私の心の奥底を見抜く様な気がする。何だか怖ろしい。「何が怖ろしい？ 私のやる事が怖ろしいのか。其を人に見られるのが怖ろしいのか？」と私は高い樹の蔭に慄へ、廣い天を見ては慄へ、アソロの反射する冷い光に慄へ、田舎の夕暮のあちこちから聞えて来る人の聲に慄へた。教會堂の鐘が鳴る。私は何者かに追はれる様な気がして家に歸つた。

燈火のまだついて居ない部屋に這入つて見れば實母が居て、

「何處に行つて来たの、ツリオ？」

「いえ今一寸戸外を散歩して来たんです。」

「ジウリアノが御前を待つて居たよ。」

「Novena は何時から始まります？」

「六時から。」

今は五時十五分過ぎでまだ半時間以上の猶豫がある。……よく熟考して見やう。

「御母さん私は一寸二階へ行つて來ます。」と云つて二三段階を上りかけて又實母を顧み

「フェデリコはまだ歸らないんでせふか？」と問ふた。

母は『まだ』と答へた。

私はジウリアノの部屋に行つた。妻は私を待つて居り、クリスチナは頬と食卓の用意をして居た。

「這處に永く何處にいらしたの？」

と哀れな病妻は穩やかに恨む様に云つた。

『マリアとナタリアとを連れて教會堂へ行つて見た。』

『あゝさう。今夜からNOVELLAが始まりますのねえ。』と淋しさふに妻はつぶやいて『此の部屋からでも音楽が聞えますよ。』とつけ加へた。而して暫くの間妻は黙して居たが今にも涙に濕はうとする悲しい淋しい心持が私の目に瞭然と現れた。

私は『何をそんなに沈んで居るの。』と問ふて見た。

『私今あの始めてのバチオラの降誕祭を思ひ出しましたの、貴方もまだ覚えていらつしやいますの？』

ジウリアノは甚く動かされた様に、眞心を私に訴へて居る。私に絡まつて首垂れて、其の疲れ果てた心を慰めて呉れ、其の涙を接吻に拭ひ去つて呉れと願ふ姿であつた。私は心の中に「さふ願はれても今は聴く事は出来ぬ。斷行すべき事がある。時は切迫した。腕を捕へた上は容易に放して呉れまいが振り切つても行く。泣いても構はずに行く。止むを得ない——今ライモンドの脇には誰が居るだらふか？ 儘に實母は居ない筈、乳母のアンナか

知らん。兎に角皆教會に行つて居る筈だ、クリスチナを呼んでジウリアノの側に置けば萬事は大丈夫であらう、是程の好機會が又とあらふか？ 今から二十分の後——斷行するのだ。』

私は此の上病妻を興奮させまいとつとめた。妻の願や感情に囚はれまい、なるだけ情に走らせない様にしやう。斯く思つてクリスチナを絶えず私等の側に置く様にし、頻に食事の不足など並べた。

『今夜は何故夕餐を一緒にして下さらないの？』

とジウリアノが問ふた。

『今日は何も欲しくない。何だか氣持が悪いから何卒御前一人で食べて御呉れ。』

餘程つとめたが胸の中の騒を全く隠す事は出来なかつた。三四度ならず妻は不思議な眸を放つて私の所作を窺つたが、突然顔が曇つて終つた。食事は少しもせず、葡萄酒の洋杯には心持唇をあてたのみ——私はあらゆる決心の力を振るい起して室を出る事にした。而して市街を馳走する馬車の響に事よせて、

『フェデリコが待つて居るだらうから、じゃあ行くよ。私が行つてもクリスチナが残つて居るんだからねえ。』と云ふとジウリアノの顔は震へて今にも涙が滴れさふに見えた。妻の答をも待たずに急いで私は家を出た。が餘りに急いだのでクリスチナに私の歸るまで此所に居れと云ひ附けて置くのを忘れられた程であつた。

外に出て胸の中の騒を鎮めやふと暫の間佇んだ。『若し私が此の神經の興奮を鎮める事が出来ぬならば私の斷行は到底出来ぬ。』などと思つた。耳を傾けたが聞こえる物は自分の心臓の鼓動ばかりであつた。廊下を傳つて階段まで行つたが誰にも逢はなかつた。『何怖れる事があるものか』と又二三分佇んだ。其の間に張りきつた私の心が急に弛んだ。不思議に茫然として私の考へが私の頭から何かの意味で抜けてしまつて憎として私の眼は機械的に欄干の柱を數へたのであつた。

『アンナは確にライモンドと一所に居るんだらふか？ 育児室は教會堂に近いから NOVINA が始まつたら直ぐ聞えるだらう。』などと思ひながら育児室の方に歩を進めたがまだ扉に行かない先に、笛の調が聞こえて來た。何の躊躇もなく扉を開けて這入つて見ると思つた通

りアンナが椅子の側に立つて居る。其の姿を見ると何となく神々しい思ひがして山國の音樂を聞いて故郷を思ふ情が溢れ昔の宗教畫でも見る様な感じがした。

『嬰兒は睡つて居ますか？』

と問ふて見たがアンナは一寸頷いたばかり。

幕を隔てて遠い所から來る様な音樂の調は長く餘韻を曳いて聽いて居る人に夢見る様な醉心地を興える。其の間に爽かな豎笛の音が交つて永久迄も忘られないやふな楽しい心を起させるのであつた。

『ライモンドが睡つて居るなら私が此處に居るから NOVINA に行つては如何ですか？』とアンナに云つて見た。

『では一寸失禮致しませふか。』

『エ、宜敷いとも、行つて御覽なす。』

アンナの目は輝いた、

『では失禮ですが……』

「悠然と見ていらつしやう。」

私は自分で扉を開けて乳母を送り出してやつた。爪立つて足音させず搖籃の脇に行つて覗いて見ると無心な顔をして親指を内側に小さい掌を握りしめて平和にライモンドが睡つて居る。其の臉を透して灰色の眼球が見える様な気がしたが別に今迄私の心に蟻つた憎悪の姿でもなかつた。何だか可愛いやふな氣もした。私は罪惡を犯すと云ふ事は本能的に怖れた、而して思つたばかりでも指が慄へるのであつたが其の時は只冷い鋭い意志の作用に強ひても従つたので、私のした事は皆意識して居る。

入口の所へ行つて扉を開けて誰も居らぬかと廊下を見廻し、又窓の所に行つて外面をも見た。實母がいつか話した通りデオバンニが何處からか窓を覗て居るのではないかと思はれた。窓から半身を出して四邊を忙しく見廻したが眼に觸れるものとはなない。唯冷い風が身にしむ様に吹くのに DEWBUB の音樂が運ばれて來るばかりである私はそつと窓から離れて搖籃に近より厭ふ思ひをしながらそつとライモンドを抱きあげた、而して鐵槌を打つやふな鼓動のする胸のあたりまで持ち上げて窓に運んで行き身體一面を冷い冬の夜の風に

晒した。

私は何事も沈着で急せらなかつた。寒天を見上げた時澤山の星の泣きすすする様な光と玄關の洋燈の光が風に揺れるので四邊に投げられた影が幽霊の様に逍遙ふのを見た。遠くの犬の聲も教會堂の合笛の響も明かに聞いた。

嬰兒はブルブルと慄へて眼を醒しかけた。

「もふ泣く頃だ。一分間位は晒したから、此の風邪の爲めに死んで呉れ相なものだ」と思つて居る内嬰兒は腕を突き出して噓をする様に口をゆるめたが聽て大きく口を開けてワツト泣き出した。其の泣き聲が以前と變つて何となく絶え入る様であつたが其は或は聽く私の心持が異つて居たのであつたかも知れぬ。が兎に角其の悲しい哀れな聲が無暗に私を恐怖に満たした。飛ぶ様にして嬰兒を搖籃の中に置き又戻つて窓をしめ様とする時猶一度暗黒の中に眸を投げたが只星の光があるばかり。窓を閉めて私の行爲を靜に——然し私の胸は轟いて居たが——顧たのであつた。後の方ではライモンドの前よりも大きな泣き聲がする。「是れで既ふ良いかしらん」と思つて扉に行き廊下を見た。廊下は荒涼として徹に音樂

の波が漂ふて居るのであつた。

「誰も私を見たものはないだらう。大丈夫だ。」——又デオパンニが窓から窺つて居はせぬかと不安が胸に群つたが、も一度窓を覗いて見たが誰も居なかつたので心を落ちつけた。蠟燭の光で搖籃の中を見ると嬰兒は以前の儘に頭巾も冠り誰も觸つた様な跡が見えぬ。が然し唯泣いて泣いて泣き止まぬので私は何とかして鎮めやふと思つて其の脇に座つた。

其の泣き聲が淋しい空に行き渡る。私は不幸なる犠牲の斷末魔の様に思つて身體中が苦しくなつて來た。無暗と何處かへ逃げて行き度くなる私は遂に廊下に飛び出し、扉もよく閉めないで其處に佇んでしまつた。案外に細つて來た嬰兒の聲がゆるやかな音樂の波と纏れ纏れて長い長い廊下で微に消える。ジウリアノは其れを聞いたか知らん。聽いて何と思ふだらう。ジウリアノは泣いて居はせぬか。何だか無性にジウリアノが歎き苦しんで居る様に思はれた。

想像と感とが私の腦を亂し——矛盾の斷片の不條理な怨が幾千も眼の前を掠める。私は狂人にならねばよいがと急に怖ろしくなつて來て不圖「何時間経つたかしらん」などと妙

な事をも自分で問ふて見た。實際時間の觀念が頭から消えて居た。

音樂は止んだ。「最早 Novena は濟んだか知らん」と思ふと「アンナが急いで歸つて來る。實母も歸つて來る。ライモンドは泣き止んだか知らん」と私は再び育児室に這入て私の罪の痕跡は少しもないかと見ると嬰兒はもふ死んだか知らんと云ふ様な漠然とした考で搖籃に近づいて見た。嬰兒は何事も知らぬ者の様に親指を内側に握つて居る。「よく睡つたな、あゝ此れで大丈夫、是れで疑はれる心配はない」今迄した事が夢見る心地で不愼なものになる突然私の心に大きい空閑が出來た。

「乳母の足音が廊下に響くと私は直ぐ行つて見た。實母は居なくて乳母一人歸つて來た。

「ライモンドはまだ睡て居るよ。」

と云ひ終らぬに私の足は早や乳母から遠く去つて居た。

其の時から私の心は茫然として全く疲れはて、何事も考へる事は出来ず、明晰なる意識を失ひ、注意力が惰れ、眼の當りの事件が一切判らなくなつて終つた。今仕遂げた事を思ひ出しても其れが亂れた、混雜した斷々なものになつた。

其の晩は私は病室に行つてシウリアノの寢臺の側に腰を下したがり長い間無言で居た。口を開く事が非常に倦い。漸々にシウリアノの顔を近づいて見つめて「今泣いては居なかつたか。」と、之れだけ問ふた。

「いゝえ。」と妻は答へた。

「什ふしたのだ?。」

「何も變りもありませんわ。——貴方は?。」

「今日は不快で頭が變で仕様がなない。」と云つて疲れ果て、私は身を倒した。手足が重い鉛の様に思はれる。シウリアノの枕の端に頭を置いて數分間名づけ難い苦痛に懊んだがシウ

リアノが私に云ひかけた聲が急に私を驚かした。

「何か貴方は私に秘して居らつしやいますのね?」

「いや、何故其様な事を云ふの?」

「でも左様思はれてしやふがありませんもの。」

「其れは御前が間違つて居るんだ。」

「ぢふでせふか?」

私は黙つた。矢張妻の枕に自分の頭を乗せた儘寢て居た。

一分間ばかり經つて妻は突然私に云つた。

「貴方は嬰兒の所に屢々居らしやつて?」

此の言葉に私は頭をもたげて妻の顔を見た。其の顔は亂れて居た。妻は猶ほ言葉を續けて、

「其れは貴方の御勝手で育兒室にいらつして、いくらでも嬰兒を御覽なさいまし……私はよく存じて居りますわ今夜も……。」

『どふしたと云ふのだ?』

『私は堪えられませんわ——貴方の御心を察しますと私は堪えられませんの。貴方は御自身を苦しめていらつしやいますのね、育児室で貴方はどんな思ひをなさるのでせふ——夕登も一所にして下さらず貴方は……ッリオさま貴方は私から隠さふとなさつても隠されませんよ。』

『何をそんなに隠すと云ふの?』

『でも隠して居らつしやるんですもの。』

此の言葉に私の血液は一時に冷えた。

『私が何を隠さふ。御實母さんでも何と云つたのか? 什ふしたのだ?』

二人は喘ぎながら話した。廊下で足音がする。今實母が狽へ、ライモンドが死ぬと云つて來るのではないか知らん」と思つた。

が這入つて來たのはマリアとナタリアとエヂス夫人とで寢臺のあたりが急に賑になつた。教會堂の種々の飾りつけ、蠟燭や笛の事など一々悉しく話した。

私は頭痛が激しいのでシウリアノの部屋を捨て、自分の室に歸つた。もふ全く疲れ果てて寢臺に身を投げたまゝ、幾時間か眠つてしまつた。

次の朝の輝きを見た時、私の心は漸く鎮まつた。鎮つたと云ふよりは不思議に無關心になつて氣拔けた様であつた。誰も來て私を亂すものもなく何事もなかつた様に思はれ前夜の事が遠い昔の臚の物になつたやうな感じがした。其の時の私と其れ迄の私との間に深い淵が出来て過去を現在が斷絶して私の生命に切れ目が出来たやふ、昔の事を考へ様とは少しも思はず身體と心とのどちらをも働かせて見たくない。唯々今迄潜つて來た錯雜した暗黒の感じの纏れの意識を全く忘れて此の儘にしていつ迄も居たい、今迄過ぎ去つた死人と今の私とが無關係なもの様に見える事を考へて見たくない。丁度半分不隨意になつた病人が自分の身體の片側を死骸と思ふ様に私は今迄の事を死骸と思つた。

暫くもたゝぬ内に扉で叩がする。フェデリコだ。何を知らせに來たのか知らん。扉をあけて這入つて來る姿が急に私を醒ました。

『昨夜は私が遅く歸つたものだから會はなかつたね。』

『さふでした。』

『お前。頭痛がするつて？』

『さふ。それで昨夜早く床に就きました。』

『今朝も顔色が悪い様だねえ。お前も頭痛がするし、ジウリアノさんもまだ床を離れず、御實母さんもライモンドが悪い咳をしたと云つて大心配だ。何故此の様に病人が絶えない事だらうね。』

『ライモンドが咳をしましたつて？』

『エ、ほんの一寸した風邪だらうが、御實母さんが例の仰山だから。』

『醫者が来て居ますか？』

『イ、エ未だ。其れよりかお前の顔は餘程悪いやふだよ。』

『否、私は構ひませんが、が嬰兒は大切ですから一寸した咳でも用心しないと取り返しがつかない事になりますから——』

兄は愁はしい眼色をして私を見つめて居る其れを見て私の心は恐怖と耻に充たされ

た。

フェデリコが去つて了つた時私は寢床から飛び起き「愈々結果が結果を生むだか。いつ死ぬのか知らん。萬一死なないとしたら……いや、いや死ぬる、必ず死ぬる」と思ふ刹那眼の前に嬰兒が苦しさに口を歪め、咽に痙攣の波を立てて居る姿が浮んで来る——。

「驚く程の事は少しもありません。風邪の氣は唯少しありますが氣管枝には少しの故障もありません。」

とライモンドを診察し、も一度嬰兒の小さな胸に耳を當て、居たが私の方を顧み、

「脈搏も平常と變りません。貴方の耳を此處に着けて御覽なさい、聴こえますよ」

私は醫士の云ふ儘にして見たが實際何の故障もなく健康な熱度であつた。

「全くですよ。」

と云つて私は實母の方を見た。實母は搖籃を右に廻はり左に廻はりして可愛い孫の病狀を氣遣つて居た。

氣管枝炎の兆候だになかつた。呼吸は全く平調で時々微かな咳をするものゝ食事と睡眠も健全と云ふ外はない。私自身が早此の子の健康なのに驚いた「私の計畫も不結果か。見た

所死にさふにもない。何と云ふ執念深く生まれたんだらう」と思ふと前よりは幾十倍かの憎惡の念が叢つた。而して其のライモンドの落ち附いた紅の頬が絶えず私を悚立たせる。

今迄の煩悶苦心の結果も此の嬰兒にあつては水泡に歸するより外はない。遂にはライモンドの生存の能力を不思議に思つて迷信に陥り、其れが意地穢い反抗心と相結び相纏れる様になつて來た。「もふ一度彼の所作を繰り返す勇氣は更がない。あゝ什ふしよふ。私は永遠に侵略者ライモンドの犠牲となるのか。其れを逃れる事が出来ないか、すると小さな拙れた幽霊の様なライモンドが猫の様な眼をしてどんな智慧でも廻はる様にこまじやくれて、私を睨む。——荒涼たる光景になり、全身彫刻の様にライモンドが現はれるのであつた。

其の日は雪でも降つてくる様に空が寒さうに白むで居た。ジウリアノの寢臺は猶ほ私に取つては逃るべき天國でライモンドも此處には容易に侵入しないのであつた。既ふ私は荒廢する儘にまかせて、何物をも隠さふとは思はなかつた。

私は哀れなるジウリアノの姿をつくづく見ると「既ふ妻は治らないのか知らむ。床を離れる様な事は永久にないかも知れぬ」と思はれた、昨日の晩妻が云つた事が思ひ出され漠

然と嬰兒は私を滅ぼす様にジウリアノをも滅ぼすのではあるまいかと思はれて来てジウリアノの生命は一寸一寸縮つて行くやうな氣がする。あゝ彼のか弱い心をどんなに苦めて居るであらふ。

夢の様な感じの切れ目に過ぎ去つた昔の記憶——苦しい他の思ひ出——が浮んだ。其の記憶を集めて目のあたり昔の面影を描いた。悲しいスキートな其の當時は私が苦しい現在の種子を蒔いたのだ。雪催ひの午後、光がいつかジウリアノと共に詩集を讀んだ事を思ひ出させた。二人の頭が同じ頁の上に頸垂れ、同じ行を追つた。ジウリアノの蠟造の様なが讀む儘に行の下に爪の跡をつけた。

願くば宴の餐のつゝましき小歌に

永久の其の聲をこそ受け入れよ

そよ悲しみの僅なる心にまざるものぞなき。

(柳虹氏)

而して妻の手首を取り私は静に頸垂れて「御前は——忘れて御呉れ。」とつぶやいた。其

の時妻は私の口に手を置いて『黙つて』と云つた。

「何故此様な事を思ひ出す？今さら後悔して何の要がある——『萬事後れた』」

「何を考へて居らつしやるの？」

とジウリアノが此の時心配相に問ふた。ジウリアノは私が黙つて居る間、あらゆる同情の籠つた光を眸に集めて私を凝視して居た。

私は總てを語つた。ジウリアノは淋しい胸の奥底を徹して來る微な、然し私の全身にしみ込む聲で、

「私も——私も心の中に貴方の爲めに天國を持つて居ります。」

それから長い沈黙に落ちてジウリアノは注ぐべき涙を心の中に凝つと溜めたのであつた。「あゝ既ふ私は貴方を慰める力も御座いませぬ。慰めると云ふ事は貴方にも私にも失くなくなりました。總てが失はれました。」

とジウリアノが沈黙を破つた。

「呎々萬事失はれたのだ！」

と私も言葉を合した。

而して二人は見交した。見交した眸の瞬間には同じ思ひに満ちて居た。

ライモンドの死！

私は暫く躊躇したが楡の樹蔭の彼の夕べの事を思ひ出して――

「彼の時神に祈つたの？」

と聞いた私の聲は慄へて居た。

ジウリアノは聽えるか聽えぬかの聲で、

「祈りました。」

妻は目を閉ぢて眸をそむけ、顔を枕に埋め急に寒さに襲はれた様に着て居たものを頭から冠つたのであつた。

四十八

夕方又私はライモンドの所へ行つた。嬰兒は實母の腕に抱かれ、血の氣のない顔をして居たが呼吸はやすらかで何の障もない様に見えた。

「ライモンドは今迄睡つて居たよ」と實母が云つた。

「其様に長く眠りましたか？」

「今迄は此様に永く眠つた事はないのにねえ。」

と實母は心配相にして居る。

嬰兒の顔を覗くと灰色の眼がそつと慄る相に鈍い光を放つて開いた。而して乳でも吸ふ様な口つきをした。すると涎掛の上へ乳を吐いた。

「あゝ……此の子は何故此様に悪いんだらふ。」

と實母は心配相に頭を振つた。

「咳はしない様ですねえ。」

と云ふ。其の返事でもあるかの様にライモンドが咳をした。

「ツリオには此れが聴こえないの？」と實母。

咳は乾いた様なので僅の間續いた。

私は心の中に考へた。「忍耐して居れば死ぬ時が来るだらふ、」

此のライモンドの死に相な前兆が目映ると急に私の憎悪の念がなくなつて、怒が消えて只私の心の悲惨なのが瞭々と見えるばかり。此れから先起つてくる結果には一切構ふまいと思つた。

其の晩の事が私の記憶の中で最も荒んだ、最も悲惨なものとして残つて居る。

チオバンニが家のまわりに迂路ついて居はせぬかといつか兄と一緒に彼の老爺に逢つた邊に出て見た。夕日の奇麗な輝が初雪の來るのを知らせる。道の兩側の葉が地に落ちて淋しい枝が天を突き刺す様に群つて居る。

此の時私は老爺に會はふと思つて四邊を見まわした。老爺の教子を思ふ優しい心。老ひの波に追はれた寂しい愛と云ふ様な事を考へ又其の骨張つた手が搖籃の中のライモンドに

觸れる時の優しかつた事も思ひ出した。又白い大輪の花葩の中に蠟燭に照らされて横たはるライモンドの死骸を想像して其の死骸の脇にチオバンニが泣き仆れて居る姿も思つた。すると實母もどの様に落膽するのだらふ、實母のみならず家族總てがどの様に悲歎にくれるのであらふ。吁々此年は葬式のクリスマス……ライモンドが死んだと云つて病室に知らせに行く時ジウリアノはどんな顔をするのだらふ？」

道をだんだん迎つて行くうち見る限り人影のない所へ來た。四邊の景色が漸々夕闇に沈み、静寂に沈む。遙の山で火が一つ見えた。私は歸り道に向つた。白い物が目を掠めて去つて逃げる。それは初雪であつた。

歸つてジウリアノの寢臺の脇に座つて暫く居ると教會堂で Novena の續きを奏する笛の樂が微に聞えて來た——昨夜の此の頃であつた。

其の晩も過ぎ夜となり朝となつたが別に驚く程の事も起らなかつた。醫士が嬰兒を診察した時一寸した鼻カタルがあつて氣管枝にも微かな故障があるが心配する程でもないこと云つた。然し私は醫士の斯く云ふ裡にも慥に蔽ふべからざる懸念があるのを見た。醫士は數言の注意を與へ猶ほ日の中にも一度診察に来ると云つた。實母の顔には愈々憂愁が現はれた。

私はジウリアノの室へ行つた。而して妻の顔も見ずに「餘程悪い」とつぶやいたのであつた。

二人とも永い間言葉を交はさなかつた。時々私は窓の側に歩きよつて雪の降る外面を見たり又は其處等を往復して平安の心の餌となつた。ジウリアノは枕の中に顔を埋め身體を全く寢具に隠さふとして居る、私が近寄ると一寸險たゝいて私を見るが、其の意味は私には解されないで、

「寒いのか」と問ふて見たすると妻は唯、

「ハイ。」と答へたのみ。

然し其の日はそれ程寒くなかつた。私は再び窓の所へ行つて止み間なく降る雪にだんだん白くなつて行く景色を眺めた。それは午後の二時頃であつた。育児室では變つた事はありはせぬか？ 慥に何事か起つて私を呼びに来るだらふ。と私は非常に不安になつて遂に堪え切れず自分で行つて見やふと思ひ立ちて扉を押し開けた。

「何處にいらつしやるのか？」

と鋭くジウリアノが腕に半ば身體を支へて云つた。

「遂其處まで——ほんの一分間程——直ぐに歸つて来るから。」

ジウリアノは身動きもせず眞蒼の顔をして私を眺めた。

「行かない方がいゝかね？」と私が問ふた。

「ツリオさま、此處に居て下さいまし。」

妻は腕に寄つたまゝ身體を休めなかつた。怖しい色が其の顔に漂ひ、眼が不安の影を急

ぎ追つて居る様に怪しく輝いて居る。私は其の近くに寄つて休ませ其の額に手をやり優しい聲で、

「什ふしたの？ ジウリアノ。」

「私——私何だか怖しくつて——。」

「何を、ジウリアノ？」

「譯もなく苦しい御座いますわ。——病氣の故ですのね。」

ジウリアノの眼は私の方に向かず始終室内のあちこちを見廻はして居る。

「何をジウリアノ。何を見て居るの？」

「いえ、何も。」

私は再び其の額に手を置いた。温熱は平常であつたが何となく非常な不安を感じた。

「ジウリアノ。ジウリアノ。私は決して此處を去らないからね。」と云つて私は傍に腰を下した。私の心は大凶變を待ち受ける様に騒いだ。直ぐにも誰か来て怖しい事件を知らせる様、私の耳は微かな音にも愕然とする。家の中にはあちこちで鈴が鳴る。玄關のあたりで雪

を滑つて来る馬車の氣配がする。

「醫者が来たのか知らん。」と私は云つた。

ジウリアノは息を凝し二人は黙つて待つた。無限の時間が過ぎ去つた様な氣持で居る時扉を開ける音がした。足音が近づく、私は直立しジウリアノは寢臺から起きた。

「什ふなつたららふ？」

とは云ふものゝ私には既ふ總てが讀めるやふであつた。這入つて来る人の云ふ事まで明瞭と判つて居る。

クリスチナが這入つて来た。クリスチナは心の愕を飽く迄鎮める氣配が見える。一寸戸口の所に立つたが、

「旦那様、一寸。」と云つた。

私は急いで寢臺から離れ、「什ふした。」

「ライモンド様がお悪いからお早く……。」

「ジウリアノ。一寸行つて来る。——クリスチナ此處に居れ——直ぐに歸つて来るから。」

扉を出て育児室の方へ走つた。

實母は搖籃の上に身を屈めながら「ツリオや。嬰兒が死ぬる！」と絶望の聲を放つ。

「早く御覽。々々々々。」

私も搖籃の上に身を屈めた。突然な變化——全く不思議な程の激變が嬰兒の顔に現れて居る。灰色になつて血の氣はなく、唇の色が褪せ眸の光が鈍くなつて居る。何か激しい毒にでも中てられた態である。

實母は涙をすゝりながら病狀を語る。「遂一時間前迄は何の事もなく唯咳をするばかりだったのでアンナに委せて一寸他所に行き既ふ寢て居るのだからと思つて歸つて見たら此處に……冷くなつて……」

私は嬰兒の顔や、頬に觸れて見た。餘程冷くなつて居た。

「醫士は？」

「まだ見えない。今呼びにやつたの。」

「馬で行けば早かつたでせふに。」

「あゝ勿論フェデリコが馬に乗つて行つたよ。」

「馬に乗つて？それぢやもふ来る筈だが。」

私の不安は僞ではなかつた。——眞實眞面目であつた。私は此の無邪氣な犠牲を少しも助ける事なしに見殺しにする事は忍びなかつた。現在目のあたりに死に顔を見ては私の罪業は終つて心に滿つるは憐愍、悔恨、苦悶ばかりで眞實私は實母に倍した不安の思をして醫士を待ち受けた。噫！鈴が鳴つた取次ぎの者が歸つて來ると私は問ふた。

「フェデリコは歸つて來たか？」

「ハイ。」

「歩いて？」

「こゝろ、馬車で。」

と云つて居る間にフェデリコは喘ぎながら、

「まだ大丈夫ですか？」

と云ひながら這入つて來た。

實母は猶搖籃の上にも身を屈めて居た。

フェデリコも急いで搖籃を覗き込んで、

「呼吸が止つた。——呼吸がしない」と云ひながら小供を抱き上げて揺つて見た。

「フェデリコ、何をなさる。そんな事をすれば却つて悪い。」と實母は叫んだ。

するうち、扉が開く——

「御醫者様。」

ゼムマ國手が這入つて来て「丁度來かかつて居る所に御使に逢つた次第で。ライモンド様は——。」

と云ひながら答を待たずフェデリコの傍に行き抱いて居る嬰兒を受け取り其の顔を眺めた。ライモンドの頭は早や力なく垂れて居た。

「さあさあ早く着物を脱がして。」と云ひながら嬰兒をアンナの膝に置き實母と共に忙しく裸體にした。

身體も顔の色と同じく灰色になつて血の氣のない手が力なく垂れ、唇も開いたまゝ、國手

の大きい掌が身體の彼處此處を撫ぜるばかりであつた。

「嬰兒を什ふかして下さい。お醫者様。救けて」と實母は狂ふ様に叫んだ。が醫者は既に絶望して居た。手の脈を取り胸に耳をあて、

「もふ助かりませぬ。什ふして此様にまあ突然に變つたのでせふ全く驚きました」と云ふばかりであつた。

實母は國手に始末を語らむとしたが涙に咽ぶばかりであつた。國手は何か嬰兒を昏冥の狀態から變へて見たいと思ひ、吐かせて呼吸を歸さふと試みた。私は眼を大きく見開いて涙の流るる儘にまかせ其の手術を凝視した。

「ジウリアノさんに知らして？」と兄が問ふた。

「いやまだ——然し知つて居るでせう。クリスチナが話したでせうよ。兄さん、貴方は此處に居て下さい。私が行つて來ますから。直ぐに歸つて來ます。」

一目手術の下にある嬰兒を見、一目實母を見てジウリアノの部屋に急いだ。「ジウリアノに何と云ふ」と扉に行く途自問した。——「眞實を語らふか？」——病室に這入るとクリス

チナが側に立つて居る、寢臺の幕を分けて這入つて見るとジウリアノは寢具に身を隠して悪魔の手に捕へられた様にブルブル震へて居る。

『ジウリアノ——私だ。』

妻は顔を現し、私の方に向いて、

『ッリオさまあそこからいらつしつて？』

『左様。』

『話して下さいまし。』

私は妻の上に身を掩ふた。話す間に顔と顔とが相接した。

『餘程悪い。もふ助からぬ。』

と私は云つた。

『助からぬ？』と同じく不安の答へ。

『助かるまい。』

『死ぬのでせふか？』

『どうとも云へぬ。』

突然妻は寢床から兩手を出し私の首に抱きついた。お互の頬は酷く接した。ブルブルと震へた。私は妻の弱々しい胸の其の堪えられぬ激しい鼓動を感じた。刹那に育児室の光景が眼前に現はれ、ライモンドが開いたまゝの唇と、鈍い色の眸とを私に向けて瞰む。實母の涙が溢れる——その時の慘憺たる抱擁に私の心臓は痛み精靈は衰廢し、底の知れない深い暗い淵の上へ落ちかゝつた。

夕暮にライモンドは、全く呼吸が絶えた。小さい死骸が鉛色になつて、一寸鼻の先だけ赤く、唇が暗い紫色に變り果てた。臉の間から眼の白みが見え、足の附け根の所に、蒼くなつた血の塊が着いて居る。僅か十時間も経たぬ以前に實母の愛の腕に抱かれた、薔薇の花の様な風情は、跡も留めず消えて、最早、身體も崩れむばかりで有つた。

私の耳の底には、未だ實母の泣き聲や、氣狂ほしい言葉が残つて居り、フェデリコや女中などに扶けられて、外の室に導かれた有様も、瞭々と目前に浮ぶ。――

「誰もライモンドに、指一本たりとも觸らせぬ。此の私が湯濯してやる。私が萬事を整へてやる。――」

育児室の扉は、幾度か開いて閉ぢて、多くの人が出入りしたが、私は唯一人残つて居た。國手も居たが、私の心は唯一人であつた。非常な異つたものが、私の心を利用して、夫れを何とも辨別へる事は出來ず、唯茫然とするばかりで有つた。

醫師は緩く私の肩を叩き、親切な聲で、

「貴君は、彼方に行つて居た方が、いゝでせう。」

私は言はれるまゝに、一人悄然として廊下に出た。誰か、柔軟に私の腕に、觸つた者があつた。兄のフェデリコであつた。兄が何を言つたか判らぬ。唯ジュリアノと云ふ名が聞えたり、涙も出なかつた。何の感情も起らなかつた。唯、あらゆる物に絶した苦しみに、我が心は總べて聳したので有つた。

盲目が縋る様に兄に腕を扼して、

「ジュリアノの部屋に連れてつて下さい。」

ジュリアノの部屋の前に來た時、私は『放して』と僅かに言つた。兄は、凝乎と手を握つて去つた。

扉を開けて私は這入つた。

其の夜の間、家の静けさは墓場の様であつた。廊下に一つの燈火が輝いて居る中を、夢遊者の様に私は迷つた。扉が半ば開いて、幕を透して来る薄光が見える。其の時私は扉を開けて這入つた。

搖籃が室の中央に置かれ、蠟燭が四隅に立てゝある。片側に兄が、片側にジョバンニが嚴かに座して居る。ジョバンニの居る事が、私を別に驚かさなかつた。別に、夫れが不忠義でも無い。私はジョバンニに、問ひも言葉も掛けなかつた。唯、私は彼等の顔を見て、會釋の代りに微かに頬笑んだ。私の唇は、微笑む様に動かなかつたかも知らぬ。通夜する人々を見て、

「私の事には、心を勞するな。慰めて呉れるには及ばぬ。私は慙慙に落ち着いて居る——平氣だ。」と云ふ心持を現したい様な、氣もした。二三歩足を運ばせて、私も二つの蠟燭の間に、座を取つた。座して、頸垂れて燃ゆる焔を見ながら、もう何事も確實を失つた、弱

々しい自分の心を顧みた。兄と老人とは此處に居りこそすれ、私は全く孤獨に感じた。洗禮式の時の様に、白い衣に包まれて、呼吸絶えた嬰兒は横たはつて居る。唯、其の顔と手とが見えるばかり。最早、泣き叫んで、私の心を苛立たせた其の口は、神秘的死に閉されて居る。其の口から、私は如何にしても、眸を離す事が出来なかつた。

此の深い沈黙の中に、私の精靈の深奥に、輝きの光りが射し込んだ。——悟つた。其れは兄の言葉を聞いてゝは無い。老聖人ジョバンニの微笑を見てゝは無い。私の言ひ難い其の時の心の有様は、黙々たる死兒の唇を凝視めて、悟つたのであつた。而して此の二人の前に、私の罪業を告白する——「ライモンドは此のツリオが殺したのだ。」と言ひたい願ひが胸に起つて抑へる事が出来なかつた。

二人は私の姿を、不思議さうに見て居た。

私は言つた。

「此の無邪氣な嬰兒は、誰の手に掛かつて殺されたのでせう？」
深い沈黙の部屋に、恚う言つた私の聲が響き渡つて、自分で自分の聲に驚がされた。冷

い怖れが私の血を凍らせ、私の舌を痺らせ、私の目の當りに朧な幕が張られた。身體はガタガタと慄へた。兄は心配して、私の身體を抱いた。耳が鳴るので、兄の言つた言葉は聞き取れなかつた。兄は私を抱いて、他の室へ行かうとする。私は、痙攣に慄へる身體を、兄に任せた。

兄は私を、私の部屋に導いた。私は猶ブルブルと慄へて居る。燈れて居る蠟燭の焰を見て、愕然とした。蠟燭の火を點けて置いたのさへ、忘れた位であつた。

「お前。着物を脱いでお休み。」とフェデリコは、柔かに私を押して言つた。私を寢臺に座らせ、私の額に手を當て、

「非常に熱があるよ。——早く着物を脱いでお休み。」

實母のやうな親切で、私の着物を脱ぐのを手傳ひ、私に寢具を暖かに着せた。而して脇に座つて、折々私の腕を取つて脈を見た。

「寒かあないの？其處に始終慄へて——もつと夜具を掛けやうか？喉は渴きはしない？」慄へながら私は思つた。「あゝ云ふ言葉を放つたのは、眞實私だつたらうか？言つたとす

れば、フェデリコは什う思つて居るか。——私を疑つて居る。——慄かに言つた。「此の嬰兒は、誰の手に掛かつて殺されたのでせう？」と慄かに言つた。而して、自分が殺した表情までしたのでは無いか。フェデリコが、種々に謎を掛けて、私の言葉を詮索して、其の果ては迷惑をする者は、醫者だ。——勿論醫者だ。何方にしても、あゝ言つたのは私の夢中で有つたと云ふ事を知らさねばならぬ。『憐う思つて居る中に、私の心は、一層の恐怖に陥つた。——』若し、全く夢中になつて、總ての事を白状しはせぬか？「最早堪えられぬ様になつた。自分で、自分の遠ざかつて行くのを、捕へる様に眼を見張つた。」

私は呟いた。「醫者が——醫者が、私のした事を悟りはすまいか？——」兄は吐息を吐いて、私の上に身を庇つて居た。

「ツリオ。氣を鎮めて、靜かにしてね。」

と言つて、手布を取り出し、水に濡らし、私の熱い額に置いて呉れた。

頭の中で、想像が幾度も入り交つて繞つた。嬰兒の死態の、身震ひする様な有様が、再び浮ぶ。搖籃の眞中で最後の吐息と喘ぎ、灰色の顔色の褪せた唇、折々開く紫色になつた

險、其の間から覗く灰色の眼球……呼吸が絶えかける。醫者が最後の手段に、搖籃を窓の處に運び、

『嬰兒に、もつと空気を吸はせて、光線を浴びせて……』

フエデリコと私とが、搖籃を持ち上げる。柩の様な氣がする。窓の所に運ぶ。が、雪の降る中を通つて来る日の光りを受けて、一層慘憺とした様が見れる。實母が、

『あれあれライモンドが死ぬる——呼吸が無い！』

『いえ、いえ呼吸がします！望みが有ります——』と言ふ國手の聲。國手はエーテルの一匙を、鉛色の唇の間に注ぎ込む。すると嬰兒が、パツチリと眸を開けて、微かな聲を叫ぶ。一寸顔が色着いて、鼻が慄へる。國手は、

『此の通り呼吸がします。望みが有ります』

國手は、嬰兒の頸を引つ張つて、空気を煽ぎ込む。舌がだらりと垂れて、小さい手がビリビリ慄ぶ。掌は紫色になつて、強く握つた親指の跡が着いて居る……是れが實母の最愛の孫!!

フエデリコが、實母を外部屋の誘ふとするけれど、實母は搖籃の上に身を庇つて、ライモンドに、顔を着けるばかりにして居る。一雫其の顔に落ちる。實母は夫れを直ぐに拭ふ。拭ふ後の小さい頭が、何時迄も窪んで居る。

『お醫者様、是れを々々々々！』と狂氣の様に叫ぶ。

私の眼も嬰兒の頭に注いだ。蠟製の様な頭の真中が、恐ろしく窪んで居て、頭蓋骨の繼目が透いて見える。黒青色になつた静脈が浮いて居る。

『是れを、是れを。』と私も叫ぶ。

エーテルの作用で、僅かに興奮した生命が、勢んだ呼吸をさせたが、應て手は垂れ、頭は落ち、頭の窪みは愈々深くなり、遂に呼吸が絶えた。實母は泣き叫んだ。

『御母様、彼方に——彼方に。』と言つて兄が頻りに誘ふ。

『いやーいやーいやー！』

國手は、猶一匙のエーテルを注ぎ込み、斷末魔の苦しみを猶續ける。再び、小さい手がプルプルと顔の邊りに慄へて上り、踏み荒かれた花片の様に臉が動く。

夕間が下りて、愈々犠牲の子が死ぬる。窓が薄明りする。夫れは降り頻る雪の所爲で。

「あゝ最早死ぬる——」

と實母が叫ぶ。最後の呼吸が止る。鼻の邊り、口の邊りに紫色が迫る。

「いえ、いえ未だ呼吸がある。」

女中の一人が、蠟燭を燈して搖籃の近くに置く。其の光りが黄色に輝く。實母は急いで、子供の裸體に觸つて見て、

「あゝ冷くなつた。」

足は曲げた儘、眞蒼に堅く成つて居る。生氣を失つた肉の塊が、燈火の光りに照らされて、其の影が明るみ、黒ばんだりする凄さゝが、未だ何處か、動く様なものが有ると思へば、未だ何處か動く様な唇の間から、乳汁が溢れ出た。實母は、狂氣の様になつて抱きつく。

眼を塞いで居る間に右のやうな記憶が、現實の如くに浮んだ。眼を開いて見たが、猶ほ怖しい様な氣持がする。

「蠟燭——を蠟燭をあつちりに持つて行つて呉れ」と私はフェデリコに叫びだ。蠟燭の青い光に慄へながら、私は寢臺の上に立つたのであつた。

フェデリコは蠟燭を幕の後に持つて行つた。も一度私を寢かせ、寢具を着せ、顔の手中を濡しなほした。

私は自分の呼吸を怖しい氣持で聴いたのであつた。

次の日も私は身體も精神も極端に力を失つて居た。其れでもライモンドの葬式に加はらうと思つた。

死兒は既う棺に納められ、硝子の蓋がしてあつた。白い菊の花輪を首にかけ、兩手にか、又その花葩で隙間々々を充たした。ライモンドの手が眞白になつて、爪の先ばかりが紫に變つたのが、菊の葩よりも美しく見えた。

兄とデオバンと私とが、二三の家族を供にし、蠟燭の流れる埋葬の儀式を待つた。白衣の僧侶が来て嚴かに十字を切ると共に一同が跪いた。

「神の御名を讃美たてまつる……」と唱へながら僧侶は聖水を棺の上に散らした。

「此の子よ神を褒めたへよ……」

と詩篇を誦しはじめた。

フエデリコとデオバンととして棺を運ぶ。ペトロ老牧師が扉を開ける。私が這入る。家族の者が手に手に蠟燭をともして續いて来る。かやうにして靜な教會堂の廊下を通つた。

「心に罪なきもの幸なれ。」

と更に詩篇を誦し、皆が葬祭室に揃つた。

「神より讚美を享けよ。」

フエデリコとデオバンとが棺を室の中央の臺の上におろした。一同が恭しく跪き、僧侶が規定の詩篇を讀む。而して無垢なる幼き心は天國に捧ぐる最も尊き犠牲なりと云つた。再び聖水を棺の上に散らして室を去つた。

其の時吾々も立つた。ライモンドの靈の最後の休み場と定められた所に、棺が安置してあつた。デオバンニが棺擔ぎをさげたまゝ、教子の棺を見て躊躇つて居る。フエデリコが眞先で穹窿に下り次に老聖人のデオバンニが柩を持して續き、私も續いた。誰も一語も語らなかつた。

穹窿は廣く灰色の石を登り、兩脇の壁龕は石の扉に閉されたのや、深く彫り込められたのがある。圓い天井には三つの洋燈が懸り、オリーブ油の焰がトボトボと燃え、濕つぽい

陰鬱な重い空気に光を投げて居た。

「是か」と云つてフェデリコが扉の閉ぢてある壁龕の一つを指した。其れを見れば、コス
タンザと彫られた名が臙に讀まれた。

デオバンニは最後の一目を皆に惜ませる爲め、棺をおろした。其れを覗くと蒼い顔、小
さい握つた手、白い衣、菊の花、總が臙ろに遠ざかる様に見え、あらゆるものを超越した
神秘的色が漾つて居る。怖しい玄妙な感じが迫つた。誰も一語も語らぬ。呼吸の絶えた様
な沈黙であつた。

デオバンニは壁龕の扉を開け、棺を其の奥に押しやつた。而して長い間跪いて動かな
かつた。

棺が壁龕の暗い奥の方で幽に見えた。柔い洋燈の光が圓い暈を描き、崇嚴な影に頸垂れ
て居るデオバンニの白い髪を照らして居た。

犠 牲 終

329
191

終